

敦賀城主、 大谷吉継が見た 敦賀湊の繁栄



大谷吉継像
(みなとつるが山車会館)

豊 臣秀吉に仕えた戦国武将の一
谷吉継がいます。秀吉が長浜を治めていた頃に出仕するようになったといわれる子飼いの武将で、やがて頭角を現して秀吉の五奉行に次ぐ地位を担うまでになった人物です。

吉継は、秀吉の没後、徳川家康と戦った関ヶ原の戦いで石田三成率いる西軍に与し、敗れて自刃したことで知られています。これは一説に三成との友情に殉じて敢えて負け戦に臨んだ、あるいは秀吉の恩顧に報いるため忠義を尽くしたと語られてき



関ヶ原合戦図屏風(右隻)(敦賀市立博物館蔵)

ました。一方で吉継は家康とも親交が深く、徳川との対決をどこまで意図していたか定かではありません。しかし、西軍勝利のための策を充分に練って戦に臨んでおり、最初から負けるつもりではなかったと考えられます。感情的に敗北を選んだとすることは決して正しい吉継評価とは言えないかもしれません。

さて、吉継は秀吉の下で多くの戦に加わり、また、太閤検地などにも関わっていたことから、領主として敦賀に滞在した時間はさほど長くなかったと考えられますが、現在の敦賀西小学校周辺を占めていた敦賀城から、旧笹ノ川を挟んで旧来より繁栄してきた敦賀湊と向き合った時、吉継にはどんな町づくりのビジョンが浮かんでいたのでしょうか。

戦乱に満ちた時代は終息に向かい、敦賀湊には北陸・東北から米や木材などが大量に荷揚げされました。これらは京都や大坂に運ばれていきます。敦賀は物資輸送の日本海側最大の拠点だったのです。吉継が城の拡張や町の整備に関わったことを具体的に示す資料はわずかですが、この時代、敦賀湊が近世の湊街へと変貌していったことは十分に想像できます。

吉継の記録も決して多くはありませんが、治世者としての吉継の能力を示すものはその後の敦賀の町の歴史そのものかもしれません。近世初頭の敦賀湊は大名勢力と強く結びつきを持った豪商たちが活躍し、長い歴史の中でも空前の繁栄を遂げています。そして、その時代の富や文化の蓄積がその後の敦賀を支えているのです。

関連史料・ゆかりの地

敦賀城の跡・
敦賀町奉行所の跡・
敦賀県庁の跡碑



現在の敦賀西小学校の隅に立つ記念碑です。この地は大谷吉継の前の領主蜂屋頼隆の時代に敦賀城が築かれて以降、その破却後も小浜藩の代官所、明治時代には県庁・裁判所など公的な施設が置かれました。

【住所】敦賀市結城町8-6 (JR敦賀駅より車で約7分)